

第5回
美しい近畿づくり検討会
平成16年6月16日(水)9:30~11:30
大阪キャッスルホテル

議題

- (1) 美しい近畿づくりの基本的方向について

榎原委員:

- 近畿とは一体どの地域なのか。みんなの認識の中で、近畿というまとまった地方はどこまでなのか。明治37年に近畿という言い方ができ、昭和11年までに近畿という地域的まとまりが了解され、北尾鎌之助は「近畿景観」という言葉を普通名詞的に用いたと考えられないか。

- “近畿の景観”というよりも「近畿景観」といった方が、近畿的、関西的ではないか。

- なぜ“美”を取りあげるのかという説明をきちんとする必要がある。“美”という言葉は

- 日本的概念ではなく、西洋的な言葉である。そのような言葉を使うのが良いのかどうか。

- “調和”、“個性”、“場所”といった2文字の漢字を用いて表現すると、意味が限定され広がっていかない。漢字一文字で表現した方が含む意味合いの広がりや深さ、格調の高さが表現できる。

橋爪委員:

- 全体を通じて高い志を持ってまとめられていると思うが、次の段階につながる大事な部分がぼんやりしており、近畿の志を感じられない。

- 今回の志の本質は、先に進むことだけを訴えていては十分でない。個別独自の新しい評価軸を考え、他の地域とはまた違う目標を持つところから始まるのではないか。

- 景観以外にも“景色”“風致”“風光”など日本的な、おそらくは近畿の美を表す言葉があると思う。そのようなものを重視する必要がある。

- 北尾鎌之助の「近畿景観」のように、我々も現代の近畿景観というものをアーカイブとしてつくっていくという発想が大事である。

佐伯委員:

- “美”という明治以降の西洋的な美術や美学という概念とともに理想化されたキーワードよりは、古い言葉を使った方が良いのではと一時は思っていたが、普遍的な価値を明示するためには、“美”が良いのではないか。

- 一方で、近畿の景観の固有性を考える時には、“やまとし”、“うるわし”といった古い

言葉で、近畿の美しさを表したキーワードをいくつか文章の中にあげておく。

鳴海座長:

- 榎原委員のご意見にあった漢字1文字での表現はあまり近畿的、大和的なイメージではないが…。

岩井委員:

- “やまとし”“うるわし”的感じで“美し国”という表現が一番良いと思う。近畿らしくしようと思えば万葉言葉だと思うが、わからないと言われるなんの価値もなくなる。

鳴海座長:

- 大和言葉はすぐ中央集権的に聞こえる。

千田委員:

- 大和言葉を使うのは、デメリットの方が大きいと思う。古代回帰的である。

- 古い言葉を使うことが良いことではなく、多くの人に理解されやすい言葉の方が良い。

- 近畿全体が持っている風景の統一性、物語性を考えておかなければ、近畿の景観宣言にならない。

- 近畿地方の中では盆地の風景とのつながりのある山辺の風景というものを重視する。そういった近畿全体のつながり性をもう少し明確に示した方が良い。

増田委員:

- “美しい”か“うまし”かは、回顧主義的に誤解される可能性があるため“美しい”といった方が良いのではないか。

- なぜ美しい近畿づくり宣言をするのか、近畿が個性を發揮して他地域とは違う魅力を持ちうるというような内容をはじめに示す必要がある。

- 景観を考えていく時は初期段階から、景観や美しいということを意識しながら取り組むべきである。景観はデザインのレベルだけでなく、もっと上位のレベル、政策判断的なレベルでも意識すべき。

- “風景”、“風致”、“風光”という言葉は、意識的に使い分けしているのか、なんとなくニュアンスとして使われているのか。言葉が混乱しないように。

橋爪委員:

- 今後の具体的な施策につながる部分の示し方で姿勢が問われる。例えば景観アセスは、画一的な対応をするのではなく、ケース毎にどういう態度でどういう望み方をするのかという覚悟を示してほしい。

川崎委員:

- “美”はどうすれば“美”になるのかというと調和、個性、場所、ゆとりなどがある。美の原理は3~4つに分かれる。その対象は歴史、水、緑、移ろいであり、協働や持続は方法論である。

- 景観形成にあたっては、元々持っている広域的な自然の体系を理解した上で、あるいは自然が持っている大きな基盤の中で公園をつくり、街路樹をつなげていくといった体系的な目が必要である。どのような景観設計をする場合にも地形や植生を大きく捉えていくことが一番のベースになる。

- 季節変化だけでなく、自然の採光を出来るだけ取り入れて陰影などを見い出した伝統的な建築様式等も大事である。

- 日本のシステムは、施設整備と鉄道路線が全く別で、周辺のオープンスペース広場やまちの都市計画と連携していない。一番問題になっているのはこういうところである。

- トータルデザインのプロデュースができるシビックデザイナー等の育成が必要である。景観や風景などの広がりを持った空間は、共同でできるシステムが必要である。

岩井委員:

- 景観デザインとは、現状景観から、引き算するもの、足し算するもの、もっと演出的にかけ算していくものの全てを含んでいる。

- 計画のプロセスの中にしっかりと景観ということを位置づけるという意味での標準化は大事だが、デザインに関しては個別に行う必要がある。

鳴海座長:

- あらゆるところに歴史があるのだから、近畿が我が国の歴史の中心的存在というのはおかしい。

- 近畿の独自性、独立性、近畿という物語性がもっと見えるようにした方が良いのではないか。

いか。近畿の地域の空間は非常にきめ細かく使いこなしているという歴史が近畿の風景の中に表れているのではないか。何か違った景観の価値があるよう思う。

岩井委員:

- 近畿の景観は、長い間人の手が入っていたためやさしい風景、人に馴染みやすい風景を持っている。そのことを表現すべきである。

榎原委員:

- 新しい概念を提示するためには言葉をつくらなければダメ。何か言葉をつくり、それに對して説明を大和言葉で示してはどうか。

- ゆとりを保つだけでなく、眺望、見通しが非常に重要である。何かと何かの間の見通し、眺望を確保することが必要である。

- 土木の世界では計画や設計をする時に科学ということを非常に重視するが良くない。環境アセスメントは人によって結果が違うと困るが、景観アセスメントではオリジナリティや独自性が大事である。

川崎委員:

- 近畿は人と自然との間、ほとりといった構造があり、自然と付き合う上での知恵があったため、上手く整合するような形で出来上がつて来たのではないか。近畿の特化したところは、人と自然の間の構造や、それに対してもの知恵を持っていたことではないか。

増田委員:

- 東京との違いは、関西は小さな盆地が集積して、都市部を形成しているということ。そういう盆地の連係構造とそれを使いこなしてきたという特徴を明確にすべき。数百年の都として文化が華やぐというよりは上手く調整してきたということが近畿の特性である。

佐伯委員:

- 美しいというモットーはすばらしいが、美化ということが口実になり、また新しいものをどんどん作ってしまうのではないか。誤解を招かないようにしなければならない。

増田委員:

- 今まとめようとしている宣言に合った事例収集、データベースづくりを長期間かけて継続的にしてはどうか。